

## エッ！月 250 万円超のアップだった？

北元理事長の報酬が、今春から月額 100 万円増額されたことに関して、文科省が調査に乗り出したと北國新聞が報じた（4 月 23 日）。同省は、私学助成を施すに当たり、私学の教職員と理事が異常な報酬を得ることがないように、年額でそれぞれ 1,600 万円、2,000 万円の上限を設定し、これを超過する場合、助成金を超過額相当分、削減する。理事長の報酬増額は、申告がなかったのであれば虚偽報告・助成金の詐取であるから、同省にとっては看過できない重要関心事であったワケである。

中川専務理事は、5 月 12 日の教員会で、同省の調査に関して以下のような説明をした。理事長の報酬増額は「理事会で」決めた。理事長は「潔しとしない」として「元に戻した」。幾らだったのかという質問に対しては、「金額は言えない」。

**増額実施が昨 2009 年**であったことは団交でほぼ明らかになっている。当時、金額は 100 万円と伝わっていたが、その金額についての回答は拒否された。もし、「今春から」の報道が正しければ「去年に引き続いて、更に 100 万円アップ」ということになる。文科省の調査では、アップ額は、詳細は公表されていないが、250～300 万円だという。付言するが、2007 年にも理事長は自らの報酬を月 30 万円上げたらしいことはこれまでの団交、および、組合ニュースで取り上げた通りである。この額についての回答もない。

**2009 年の増額分は既に**受け取っている筈である。1 年経って文科省が調査に入ったのだから、虚偽報告・助成金詐取が既成の事実であったことになる。助成金の返還は当然求められただろうが、詐取とはならず、「修正申告」で済ませられたのかどうか。どのような処分になったのかは極めて重要であるから、明確に説明されるべきところである。北國新聞が「今春から」と報じたのは、2009 年の詐取の事実を隠蔽する煙幕だったという推理はミステリー趣味に過ぎるか？

「潔しとしない」は、助成金に関して文科省に対してではなく、過大な報酬を獲たことについて大学の構成員に対してであると受け取りたい。しかし白々しい。文科省の調査後の話ではないか。調査がなかったら今後も受け取り続けていたのではないか。いかにも高德が備わるが如くの口上には呆れて二の句が出ない。漢検協会の元理事長もビックリだろう。求められるのは「元に戻す」だけではなく、大学私物化の引責だ。（増額の実態は、本人が要求し、理事会は黙認したと伝わっている。中川専務理事の説明と食い違う。）

**大学私物化**の同じ穴の貉。中川専務理事の説明の空虚さは尚も広がる。理事長以外にも、理事数人が助成金の削減対象となる高額報酬を獲ている。最近倍増した理事もいるそうだ。口を拭っているこの実態も潔しとせざるべきことではないのか？

**一体、幾ら貰っているのだ？理事は責任を取れ、**という声が教員会で出たのは当然のことである。果たして増額後の理事長の年収は幾らになっていたのだろうか。

恐らく1億円が射程にある。かつて、団交で、多額の役員報酬は「責任が重いから」と説明された。他の大学の理事長に比べて5倍も責任が重いらしい。私物化ではないとするなら、報酬額も、重いという責任の中身も、理事会は公開すべきだ。

「国際交流」の思い強く、「土日毎週のように中国へ」北元理事長が出張していることを、中川専務理事は増額の理由として挙げた(土日に接触できる要人って、どんな人なんでしょう?)。本学の入学生数が危機的状況にあることは、理事の口からも、再三、告げられている。大学存亡の淵に臨んで国際交流も何もないというのが多くの教職員の思いである。そんな職務外の活動のサポートに、減少している収入を大幅に割く発想が生まれたとすれば、これまた、本学理事会は異常過ぎる。

## 新学部構想頓挫

新学部構想が4月15日の教授会で示された。薬学部の定員の一部を未来創造学部に移し、学科再編と、新学科を創設するというものであった。ところが、5月12日の今度は教員会で、大屋数学長は計画延期を発表した。教員養成課程開設に関わる手続きが「認可」であり、準備を要するという理由のようである。手続きの見通しが立てられず、僅か1ヶ月で頓挫するとは。これまた理事会の杜撰さは一級品と言わざるを得ない。

———この3行を削除 ———

かつて本紙で、本学に蔓延するウソを特集したことがあったが(組合ニュース288号)、「言い繕う」習性は今も健在に見える。

## 国試一反省すべきは理事会

惨敗した第95回薬剤師国試。4月16日に、教員に対して「反省」及び改善すべき点を、A4、1枚以上で至急提出せよと、学長名で通達があった。新学期が始まり、教員は天手古舞いの超多忙の時期に、これは授業妨害に外ならないと言いたいところだが、それはともかく、国試惨敗の責任が教員にあることを前提としていることが教員全体の憤りを買っている。3月末からの例の「理事面談」において、「国試の結果は教員の責任」と断ぜられたことに重ねての責任転嫁である。

「量的拡大をもって質的向上を図る」という無節操な謳い文句をもって、薬学部の定員を比類無き規模の460人とし、実際には5百数十人を入学させたのは2004年と2005年。今回国試を受験した卒業生は殆どこの両年の入学生である。この定員増も、水増し入学も、教員側の判断ではない。全て法人理事会の独断と押しつけである。入試のハードルを低くしたのだから、教員は学生の教育に悪戦苦闘。何とか大半を卒業させ国試に合格させたが、なおも卒業できずに残った学生のうちの150人が今回の国試受験者だったわけである。その合格率が低かった原因は誰の目にも明らかに、拡大路線に突っ走った理事会にある。方針を決める上で見本となる大学も存在する上に、十分なデータも持っていた筈である。理事会の国試対策の方針が迷走したことを理由に挙げる人もいるが、それも尤も。『反省文』を書くべきは理事会」が教員の共通した意識である。

## 欺瞞的な学生集めのツケ

欺罔的と評される危険を孕む学生集めに対する怒りが蓄積しつつある兆候を見せている。バイタルサインが読める薬剤師の教育を標榜しながら、本学理事会は学生のメンタルなサインを見逃しているのではなかろうか。

前項の「量的拡大…」のほか、「秘伝のタレ」、「真似のできない確かな教育力」、「愛情と情熱を持って教育します」、「偏差値が低くても、個性のある、やる気のある学生を受け入れる」などのキャッチフレーズで（実に空疎だが）入学者を集めている。「偏差値が低くても」は薬学部では「学力が足りなくても薬剤師になれる」ということになるが、結果、単位が取れずに退学する者が続出している。2009年度では5% 近くになった模様である。無理な学生集めのツケとして今後も国試合格率のさらなる低下が危惧される。

**子弟の進路**に悩む父母は多い。入学さえできれば、何とかついていって卒業できるのではないかと、希望を託す親心に、恰も有効な教育システムを持っているかのような宣伝で入学を勧めるのは、薬剤師国試という厳しいハードルの存在を考えると、十分に自重しなければならない筈のことである。「個性のある学生」を受け入れると言いながらも、そのピックアップに留意しているとは思えず、個性で国試合格が可能とは思えない。これも学生を集める口実に過ぎない。進路に迷う高校生を、6年先までの責任を考えず、期待を持たせて誘惑するのは言語道断。学内からも詐欺だという声が出ている。そして父母からも、「薬剤師になれると、北陸大学は判断して入学させたのではないのか」と苦情が出ている。奨学金の貸与を受けたものの、結局退学したために、借金のみが残ったという事態も生じている。見方によっては、借金までさせて入学させ退学させたという構図になる。このような学生集めに身を託し、結果、道を誤った学生達の怒りのマグマは既に危険レベルに膨張している。理事会はこのツケをどう清算するのか。

## 自分たちはお手盛り－教職員の賃金は不払いと削減－

4月27日に中日と北國、28日には読売と毎日の各紙が、本学が労基署の指導を受け、2007年2月から2009年1月までの未払い賃金2年分を支払ったと報じた。しかし、実は、それ以前の約10年分は不払いのママ。また、支払いの明細書は度重なる要求にも拘わらず発行されなかったが、これについて読売は、本学の話として、「休日出勤の状況を把握し切れていなかった」と書いている。やはりそうだったのだ。ハナから賃金を払う気がなかったから、記録もなかったのだ。（一体、支払額はどうやって算出したのか？明細書がないために、教職員は支払い漏れなどの有無が確認できず、未だ疑念は払拭できていない。）

このように、賃金が支払われず、給与は10年間据え置き。賞与は「教育の成果が上がっていない」として削減。元々全国最低レベルだった年収が年々減少し、子弟の教育すらままならない実態。教員をして、給与の額は他大学の知り合いに言うのが恥ずかしいと言わせる有様。それに引き替え、理事のお手盛りは青天井の様相。

**薬学部定員充足率ワースト**（2010年度）の存亡の危機を招いた元凶は、受験生の心を逆撫でする学生集めを実行してきた理事会であり、反省文を書き、報酬が削

減されるべきは理事というのが全体の判断であるところ、上述の理事の行為も、また無節操、無神経、無責任と言わざるを得ない。本学の再生のために、理事は「仕分け」の対象にされるべきではないか。

## DC 作戦は果たして有効か？

高校の進学指導教員に対する入学推薦の依頼や、生徒に入学勧誘のビラを配ることなどを DC 作戦と呼んでいるようだ。その DC 作戦に全教員が参加するよう指令が出された（4月28日）。

**入試施策の失敗**を理事会は認めようとはしていない。昨 2009 年 11 月、河島理事が薬学部教授会で、入学生数が 2 桁になる恐れがあるので、教員 1 人が 1 人の入学生を確保して欲しいと「お願い」に来た。これまで、学生集めは理事会の仕事だと公言され、実際、入試に関わる施策は理事会の独断で決められてきたが、その大転換の「お願い」であった。そして半年。今度は教員全員強制参加とした。理事会の施策の失敗の尻ぬぐいを教員に押しつけたのだ。

その DC 作戦。果たして効果はあるのか。これまで、「オープンキャンパス」の有効性は言われることがあっても、この作戦の効果の分析結果は知らされていない。

**進学指導教員への訪問作戦**。遠路はるばる（全国の高校の多くを回るのである）訪ねて来た本学の教職員に面会して、教員達の脳裏に多くの感想が浮かぶことは想像に難くない。訪問の手腕の見せ所。説明を受けて「良い大学だ」と好感を抱いて貰えることもあるだろう。しかし、「それにしても・・・」と不安顔になる心配は拭えない。「学生が集まらないの?」、「不人気だとしたらその理由は?」、「4 年先、6 年先の経営は大丈夫かな」、「教員が時間を割いて、教育研究は大丈夫?」、「学生 1 人を確保するためのコストは?」・・・と。これらは、自然な連想であるが、大学の存続を懸念する方向に導く可能性が小さくないように思われる。もし、教員が懸念を抱けば、生徒・父兄に進学を推薦するのは当然躊躇する。つまりこの作戦は本学のイメージを低くからしめる危険性を孕んでいると心配される。

**高校校門で生徒にビラを配る作戦**。ビラを読んで貰える確率、関心を持って貰える確率、心に響く確率。掛け合わせた数値は、「むしろ迷惑」と感じる人の割合に比べてどれ程だろうか。

**自分の進路の決め方**として、校門で配られたビラを見て、というのはいかにも軽いのでは? 学生と話す、そんな心情が受験生に備わっているように感じられる。彼らは皆、向上心と誇りと夢を持っている。努力が認められて大学に入りたいのである。したがって、学生をかき集める、誰でも入れるような大学は敬遠したい。夢を感じ仰ぎ見る大学へ、自らの力で入学したいのである。少しカッコ良く。

読売新聞（2009 年 7 月 8, 9 日）に掲載された「**大学の實力：教育力向上の取り組み調査**」には多くの大学が回答して名を連ねている。しかし、北陸大学の名前は、回答をしなかったのか、無い。もし、教育力をアピールするのであるなら、貴重な機会を逸している。これではどのような広報活動も焼け石に水である。

DC 作戦に限らず、理事会の方針だとして**聖域扱い**をされ、見直しされずに硬直化している事例が少なくない。この陋習を打破しない限り、本学の明日は見えない。